

きっかけ作り

2007年、産経新聞元日号都内版に「ガキ大将宣言」を書いた。すでに日本がおかしくなっていた。

小学校の運動会、徒競走で先頭走っていた生徒はゴール前で足踏み、ラストの生徒を待ち、グループ全員が揃ってテープを切るのだと言う。ウソみたいな本当の話だ。こういう問題が、問題として顕在化しない、いまの日本って不思議な社会ではなからうか。これじゃあ日本の元気がなくなって当然だ。なんでこんな日本になってしまったのか。次の文章は09年1月に書いた「一億二千人総登山者化計画」の書き出しの部分である。

「いまの日本、元気がない。08年4月12日付東京新聞朝刊に、瀬戸内寂聴さんの講演録が載っていた。もちろん、源氏物語についてである。中程に『いまの日本は政治からなから自信を失っている。わたしの生涯でも最も悪い時期だと思う』、という言葉がある。太平洋戦争もくぐり抜け、85歳になろうという瀬戸内寂聴さんにして、最も悪い時期というのは大変なことだと思う。若い人が誇りを持てるよう、次世代に文化をつないでいなければ。そのためにはまず源氏物語を読むことと、瀬戸内さんは言う。別の新聞で、『考えることをやめた国』というコラムを読んだ。政治家も役人も考えること無しに、行き当たりばったりで、問題を処理しているように思えてならない。個人情報保護法然り、年金問題然り、賞味期限問題然り、である」。さしづめ現時点なら、子供手当然り、高速道路無料化然り、というところである。

だから、「一億二千万人総登山者化計画」がひらめいたということなのだが、実際問題として、登山は「危険・苦しい・汚い」という3Kがあって、垣根がちょっと高い。AKB48のコンサートなら、誰もがわっと押し寄せるだろうが、山へのお誘いとなると、そうはいかない。山に憧れを抱いている人でも、3Kに阻まれて一步を踏み出さない。

きっかけが必要なのだ。手を差し伸べ、相手の手を握って引っ張り出す。そんなきっかけ作りとして考えたのが、パハル・フェスタであり、パハル・トークであり、出前講座だ。

パハルとは、ネパール語で「たおやかな山」。高い山やとんがった山には、誰もが登れるわけではない。誰もが登れるたおやかな山、パハル。フェスタ＝祭典である。今年2011年4月29日に、九重高原法華院温泉で第1回パハル・フェスタを開催した。フェスタと称するように参加型のイベントである。

パハル・トークは、山に関わる総論的な岩崎のおしゃべり。出前講座は、技術や知識についての机上講座や実技講座。

優秀なガイドさんは大勢いるが、きっかけ作りができる登山インストラクターは数少ない。山へのきっかけ作り、岩崎にお任せあれ、ナンチャッテ。